

第3回 巡回自主上映の提案

ともに考え、対話を開く

2023 年 3 月 15 日

渡辺謙一

提案趣旨:

世界を席卷した感染症 Covid-19 とその対応により、この 3 年間私たちの生活様式は大きく制限され変更と適応を余儀なくされました。衛生緊急事態宣言、テレワーク、遠隔授業、自粛営業、マスク着用義務、私たちが生活の適応に追われている間にも政治、経済、外交の歯車は回り続けています。各国の感染症対策の違いは、その国の文化や法律が権威主義的か民主的体質かをあぶり出す効用もありました。さらにロシアーウクライナ戦争は世界を否応なしに地政学的大変動に引き入れました。その最中フランスでは 5 年に一度の大統領選挙が去年 4 月に行われ、極右の言説がメディアを介し喧伝され、極右が市民権を得たかのような錯覚さえ与えました。代議制、政党政治機能への疑念か、決選投票の 302 万票が白票でした。世界中で巣ごもりが奨励され自粛が蔓延したこの 3 年、そしてロシアーウクライナ戦争をどう読めばいいのでしょうか。世界は、日本はどの方向に向かへば良いのでしょうか。皆さんと共に考え、対話を開くことを目的に、映像を仕事としてきた者が今できるささやかな行動として試みることにしました。

議論の触媒としての 7 作品：

1. 日本・天皇と軍隊 2009 年_90 分
2. ヒロシマの黒い太陽 2011 年_90 分
3. フクシマ後の世界 2013 年_84 分
4. 核の大地・プルトニウム物語 2015 年_90 分
5. 日本・国家主義の誘惑 2018 年_52 分
6. 我が友・原子力 2020 年_54 分
7. 台湾・デジタルデモクラシー 2022 年_54 分

* 作品内容の要約は次ページ

この中から上映を希望する作品を選んでください。

会場に用意する上映のための機材は、スクリーン+音響装置+プロジェクターです。

上映用原版は私のパソコンの中です。パソコンとプロジェクターを HDMI コードで繋ぎ、パソコンから出力します。



<日本・天皇と軍隊>

敗戦時から今日までの日本政治史を、憲法 9 条成立の背景と解釈改憲の過程を軸にして描く。ロシア・ウクライナ戦争の余波を受け、再び改憲機運を醸し出そうとする改憲派の論調にどう応えるか、そのヒントを散りばめたドキュメンタリー。



<ヒロシマの黒い太陽>

核爆弾開発から原子力産業の誕生までを、開発側の論理、被曝の実態、犠牲者のことばを交差させながら描く。核開発に一貫して伴う課題は、放射線防御と放射性物質の扱いでありその被害はまず開発者の間に生まれる。核開発者としての軍産複合体には必然的に事業推進のための隠蔽と虚偽体質が生まれる。原子力発電が軍事技術の一部転用で始まった事実を確認し、核兵器と原子力の一体性を描く。

— 日本語版です。 —



<フクシマ後の世界>

東日本大震災そして原発事故のショックを忘れぬために、。2012年、現地に生きる人々の声、現実を切りとった。“フクシマ”は自然災害と人間の営みに起因する複合環境破壊を突きつける。このドキュメントは破局の観念を、原子力を、人間と国家の責任を問い直し、被災者の証言、政治学者、哲学者、作家の言葉を一幅の絵巻のように間断なく紡ぐ。

「フクシマ後の世界」とは、文明の危機を前にした私たちの"自覚のプロセス"である。

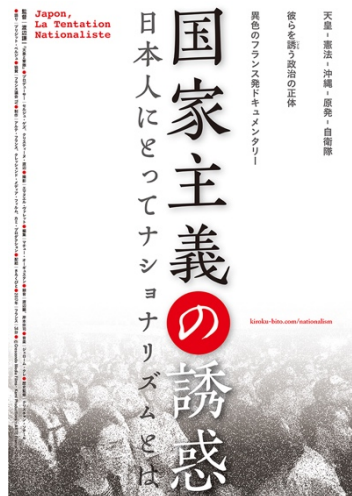
— 日本語版です。 —



<核の大地—プルトニウム物語>

米国、フランス、日本、3国の原子力施設の中でも使用済み燃料の再処理施設すなわち、プルトニウム(PU)の生産工場と周辺住民、自治体との関わり、住民の意識を描く。

PU 生産発祥の地・米国ハンフォードでは廃炉作業が30年後のいまでも継続し、巨大廃炉産業が生まれた。仏・ラ・アーグでは再処理工場脇の廃棄物処理場から流れ出る溪流に、PU汚染が計測される。“核燃料サイクル”という名の元に墓穴を掘り続ける原子力産業の自業自縛と、産業としての終わりを語る。



<日本・国家主義の誘惑>

日本のプレゼンスは地政学上常に特異な位置を占めている。外交、経済戦略のチェス盤の上で中国、朝鮮、ロシア、米国との緊張関係はこの国を時にはパートナーに導き、時には避けることのできない敵対者としてきた。この作品は東アジアの地政学的対立の根を理解し、日本の民主主義の劣化をもたらすネオナショナリズムと全体主義への傾斜、その背景を描く。ロシア－ウクライナ戦争を機に再び台頭する“国家主義の誘惑”。



<我が友・原子力ー放射能の世紀>

“被ばく”という事象についての歴史的な調査映像であり、かつ、“今日の被ばく”を語る。キューリー夫妻から福島に住む住民、核実験から原爆投下そして原発事故、その間に被ばくした兵士、子供、犠牲者の言葉に耳を傾けながら歴史文脈に意味づける。それは原子の世界の虚構に光をあて、隠蔽の繰り返しを暴くことになる。

<台湾 デジタルデモクラシー>



台湾は独立した民主国家とはみなされていない。しかし北京の脅しと国際社会の認知の不在に抗いながら、この列島は独立を示唆している。いま列島 2 千 3 百万の住民は、Covid-19 感染抑制の成功モデルとして言及される。それはなぜか、そして台湾の戦略的政治選択はどこに向かって行くのか？ その答えの一つは、若人や市民ハッカー、一般住民が支える民主台湾のダイナミズムにある。“台湾有事に日本はどうする？”この問いを発する前に、まずは、台湾の歴史と今を知ることだ。知ることは“護り”への一歩になる。

作品紹介は以上。

上映直後の展開として、作品ごとに内容と関連づけ 6 つの基調テーマを想定しています。

1. フランスメディアで仕事をする意義、日本のメディア。
2. なぜ戦争をやめられないのか、戦争の形。
3. なぜ原発をやめられないのか、欧米追従の“サガ”。
4. 日本人は“戦争と原発”を同じ地平で語ることができる。
5. 君はかつて日本が植民地帝国だったことを学んだか。
6. “歴史”は己を映す未来への道標みちしるべ。

ご希望があれば、いずれかのテーマで 15 分程度議論のきっかけづくりにお話をし、対話を開きたいと考えます。

現在、独立公共 TV と共同制作が進行中の「フランス人たちの昭和―日本戦争史」(仮題) 52 分は、この秋ヨーロッパで放送の予定です。これもいずれはぜひ日本の方々にご覧いただきたい作品です。ご期待ください。

渡辺謙一